

# 史料紹介：鈴木一馬支那駐屯軍司令官 「駐支秘録」（1922～1923）

櫻井良樹

本稿は支那駐屯軍司令官を務めた鈴木一馬（すずきはじめ）少将（階級は当時）の「駐支秘録」（以下「秘録」）を翻刻したものである。この記録は、千代田区立日比谷図書館の「内田嘉吉文庫」（618-246）に納められているものである。半紙22枚に謄写版印刷されたものに、表紙がつけられ綴じられおり、図書にあたるものではない。序文にあたる部分には、1928（昭和3）年5月に摘録し親しい先輩・知友に頒布したと記されていることから、多くて数十部ほどが作られ関係者に配布されたと思われる。本史料の元の所蔵者である内田嘉吉は、台湾民政長官や台湾総督、通信次官を務めた官僚であるが、鈴木との接点がどのようなところにあったかは詳らかではない。

「秘録」が扱っている時期は、民国11年、すなわち日本の1922（大正11）年4月～6月の第一次奉直戦争の時期と、その翌年の民国12年6月から10月までである。これは鈴木への任期（1921年1月20日から1923年8月6日まで）の後半の時期にあたる。内容は中国内政の変化と、それに対する鈴木への観察と関与を述べたものである。

鈴木は駐屯軍司令官を辞め予備役に編入されたのち、『最近の支那事情』（大阪実業協会出版部、1925年）という書物で、当時の中国政界事情や第一次奉直戦争から第二次奉直戦争に至る間の情勢変化を詳しく述べており、「秘録」と重なる記述もしているが、自分の行動についてはほとんど語っていない。またはるか後に「秘録」の一部を利用して『往時を偲ひて呉佩孚氏を語る』（国防協会、1939年）という書物を著しているが、これは「秘録」の方に書かれている裏面の事情を相当カットしているので、本史料を翻刻する価値はあろう。なお『往時を偲ひて呉佩孚氏を語る』は、日中戦争勃発後の時期に、呉を擁立して親日政権を作ろうとする動きに対して、呉は排日思想の持ち主であるとして監視と警戒が

必要なことを訴えたものである。

これらのほかにも鈴木は多くの本を出しているが、それは国防協会の手帳として国民一般に向けて、1930年代後半の時局や日露戦争に関することを説明したもので、「秘録」と関係するものではない。

鈴木が司令官を務めた支那駐屯軍は、北清事変後の1901年に締結された北京最終議定書によって設けられたもので、この時期には日英仏米の各国が北京・天津地方に駐屯させていた。その任務は、議定書の規定によると、各国租界警備と居留民保護、および北京・海浜間の自由交通確保にあった。ただしそれは表面の任務であり、条約に規定されていない任務として、中国情勢を探り本国に報告するという諜報任務も大きかった。また各国軍司令官は、軍事情報を交換したり、中国情勢の変化に対応して共同行動を行ったりしていた。

ここに紹介する「秘録」が重要なのは、司令官自らが、自分の考えと行動の意図をかなり詳しく述べている点にある。読めば分かるように、駐屯軍が、情報収集に努めているという意味での諜報活動を超えて、中国情勢の変化を日本にとって有利な方向に導いていこうという工作（しばしば謀略と呼ばれる）を行っていたことを示している。具体的には張作霖に対する肩入れがどのようになされていたのかを示すものである。これまで駐屯軍司令官の記録としては、奈良武次の日記や回顧録が公刊されているくらいであり、その点からも貴重な回想記と言えよう。

本史料理解を助けるために、簡単に周辺事情を書いておく。1916年6月の袁世凱没後から中国内政は不安定化し、軍閥間の抗争が激しくなった。北京政府では黎元洪と段祺瑞が対立し、満洲においては日本の支援を受けた張作霖が力を握り、南方は孫文らの革命党の勢力範囲だった。その中で1918年3月には張作霖軍が北京に向けて進軍し、1920年7月には段祺瑞と呉佩孚との間の安直戦争が発生した。この戦争は張と結んだ呉軍の勝利に終わったが、やがて張と呉とが対立するようになり、本史料の第1章が扱う1922年4月から6月の第一次奉直戦争へと発展した。この戦いは張軍の敗北に終わり、張は奉天に引き下がった。その張が反撃に出たのが、本史料の後に続く1924年9月からの第二次奉直戦争で

あった。この戦争では張が勝利して、北京政権はしばらく張の掌握するところとなる。二度にわたる奉直戦争については、今なお池井優「第一次奉直戦争と日本」・「第二次奉直戦争と日本」（栗原健編著『対滿蒙政策史の一面』原書房、1966年）が有益である。

「秘録」の第1章では、第一次奉直戦争で、いかに鈴木が張作霖を支持し、暗にそれに協力し、張の敗北後も、どのように直隸派に対抗する勢力の再興に協力したのかが語られている。張に対するアドバイスが、しばしば登場する張作霖の軍事顧問某を通じてなされていることが記されているが、この顧問というのが、本庄繁少将や町野武馬大佐を指すことは、『往時を偲びて呉佩孚氏を語る』で確認できる。

「秘録」を裏付ける史料を紹介しておこう。鈴木が張軍の集結を邪魔させないようにとの配慮で開催を遅らせた軍司令官会議は、確かに4月26日に開催され、以後断続的に開かれている。26日の会議では鉄道沿線に各国軍を配置することが決議され、5月7日の会議では、呉佩孚軍の白河通行を不許可とする決議がなされている（支那駐屯軍司令部「奉直戦二伴フ列国軍司令官会議ノ経過」1922年10月、「各国内政関係雑纂・支那の部・奉直戦争」外務省記録1・6・1・4-2-13、アジア歴史資料センターRef.B03050249400）。また直隸軍が日本の鉄道守備を妨害しているとして日本は天津から秦皇島に向けて3個中隊を出動させている（『日本外交文書 大正十一年 第二冊』379頁、外務省、1976年）。

「奉直戦二伴フ列国軍司令官会議ノ経過」によれば、4月23日に北京外交団からの要請を受けて26日に軍司令官会議を初めて開催したと簡単に経過が記されているが、「秘録」では張軍に有利になるよう配慮を加えたことが特記されている。これは表面的な報告ではわからない事柄である。実際の会議において、「秘録」に記されている英米軍司令官側からの提案を先に述べさせて会議を進めたことは、会議録によっても確認できる。だが会議において軍司令官の間に意見の相違のあったことは、「秘録」には記されていない。これはこの回顧録の本筋とは関係しないからであろう。

鈴木はまた第2章において、第一次奉直戦後における呉派の優勢に対

して、張作霖から資金を引き出させて議員買収工作を行い成果を上げたこと、またその際に日本の実業家にも働きかけたが、こちらは成功せず、もしその時に成功していたら、段祺瑞による民国の統一が出来たはずだが、出来なかったのは遺憾だと述べている。さらに鈴木は、孫文・段祺瑞・張作霖の三角同盟の連絡役の役割を果たしたことを記している。

鈴木が駐屯軍司令官を離れた直後に起こったのが、1924（大正13）年9月からの第二次奉直戦争であった。この張作霖と呉佩孚軍との戦争は、山海関周辺で激しく戦われ、今度は張軍の勝利となり、11月下旬に戦闘はやみ、段祺瑞が臨時執政に擁立される。この時の戦闘において勝敗の分かれ目になったのが、10月23日に馮玉祥が寝返って張側についたことであった。

この馮による呉への裏切りに関しては、その背後に日本陸軍のさまざまな工作があったことが知られている（坂野潤治「第一次幣原外交の崩壊と日本陸軍」『近代日本の外交と政治』研文出版、1985年）。坂野はその一つとして、鈴木の中義一前陸相宛書簡を引用して、張作霖から馮玉祥に100万円が渡された話に信憑性のあることを述べているが、本「秘録」において鈴木は、それを自分のアドバイスによりなされたものであることを明らかにし、このような努力によって好結果を見たのはよかったと述べている。これについては『往時を偲ひて呉佩孚氏を語る』にも、記されていない。なおこれは小林道彦『政党内閣の崩壊と満州事変——1918～1932』（42頁、ミネルヴァ書房、2010年）も記しているところだが、鈴木の前在任中からの動きをふまえたものであることが、本「秘録」からはっきりする。

以上のように鈴木は、不偏不党・不干渉政策を表明している日本政府の方針とは別に、張作霖支援という線で間接的掩護を行っていたことを記しているわけである。

ところで「秘録」が書かれた1928年5月というのは、張作霖と日本軍との関係を見る時には、非常に微妙な時期であった。蒋介石による北伐軍が北京に迫っており、張は北京を捨てて満洲に逃げ帰る直前の時期である。日本は第二次山東出兵を行っており、6月4日に張作霖に見切りを

つけた関東軍高級参謀の河本大作大佐（当時）によって爆殺事件が行われることになる。もしかしたら鈴木は、日本軍の中に援張政策を否定するような動きが出て来たことを憂慮し、これからも張を援助することが日本にとって必要だということを言いたいがために「秘録」を記して、各方面に配ったのではなかろうか。

さて本史料の翻刻にあたっては、以下のような編集を加えた。原史料には所々に句読点が付されており、ランダムに濁音や促音の「っ」が使用されているが、統一がとれていないため、適宜句読点を振り直し、濁音は補い、促音「っ」に統一した。また鈴木は「撤去」を一貫して「徹去」と書き、「赴」くを「趣」く、「記憶」を「記臆」と記しているのので、それについては撤去、赴、記憶と直した。その他は誤字の後に〔ママ〕をつけた。〔 〕内の文字は翻刻者によるものである。

## 駐支秘録

本稿は、予が支那駐屯軍司令官時代に於て起りたる、奉直兩派間の争闘に関する当時の秘録にして、今や年を閲するに従つて其の真相を知るもの漸次減少するに至るべきを想ひ、茲に之を摘録して予が親しき先輩併に知友に頒つこととせり。

昭和三年五月

鈴木一馬

## 第一章 民国十一年春に於ける第一次奉直戦に就て

### 第一 戦前に於ける政状一般

安直戦争後、裡面に暗闘を交へつゝ、而も表面親和の状を装ひ来りし奉直兩派の関係も、民国十年秋、民国政府と最も緊密なる関係を有する中国及び交通兩銀行の預金取付騒ぎあるに際し、徐世昌大總統は該兩銀行の破綻を防止して財界の安定を期するため、財政通なる梁士詒氏を首班とせる内閣を組織して時の靳雲鵬内閣に代らしめんと企図し、先づ奉天の張作霖氏と計り其晋京を促し、尚又直隸派の首領曹錕氏の晋京をも求め、梁内閣組織には両者の諒解を以て、張作霖氏の後援の下に梁内閣を作り、中国交通兩銀行の破綻を防止し得たのであったが、元來梁士詒

氏は直派とは好感を持たず、特に呉佩孚氏等より嫌忌せられつゝありたることと、梁内閣の産婆役が張作霖氏であったことが原因となつて、梁内閣は組閣後旬日ならずして呉佩孚氏等より大なる反対を受くるに至つたのであるが、徐総統は此時に至つては強いて反対も試みず、奉直兩派に対し不得要領なる操縦を試み時日を経過したが、其内に愈々奉直兩派間の暗闘は正に明闘に化せんとするの状態を呈するに至つたので、徐総統は大に苦境に陥り、王士珍氏等に依頼して兩派の間に調停を試みたが、奉派の政略的攻勢に対する直派の態度も、亦之に屈従する模様見えざるに至り、遂に兩派の戦争を見ざれば平和的に之を解決すること不可能なるに及び、加ふるに梁士詒氏も亦自ら進んで総理を辞せんとせず、請暇に請暇を重ねること五度にして、天津英租界の自邸に引籠りて出でず、益々事態險悪に陥り、遂に奉直兩軍の風雲急を告ぐるに至つたのである。当時奉直兩派共、最早眼中徐総統なく、徐氏の哀願的態度も、王士珍、趙爾巽、王占元、張錫元等の調停運動も何等其功なく、兩派は先づ互に電報戦をなしつゝ、挑戦の責を他に転嫁するに努め、又一時は奉派も平和的解決を希望せしこともあり、直派特に其首領曹氏兄弟の如きは、大に平和解決に努力したる形跡ありしも、当時旭日昇天の意気を示せる呉佩孚氏の奉派に対する攻勢的意図は、遂に張作霖氏等の戦意を固めしむるに至りたるは、蓋し当時の状勢上自然の勢と見るの外なからん。

## 第二 民国十一年四月に於ける奉直兩軍の集中

前項に述ぶるが如く、今や奉直兩軍は最早血を見ざれば止まざるの状勢に立ち至りたれば、四月十日前後より、奉軍は関内に向つて続々増兵輸送を開始し、直軍も亦陝西、湖北方面より保定方面に向て陸続軍隊の集中を開始し、尚ほ奉軍は四月二十日頃より一週間に亘り東三省軍隊の主力を関内に集中輸送するに至つた。

## 第三 帝国政府の取りたる態度

今や帝国のため特種の關係ありと中外共に是認しある満洲の主権者〔張作霖〕と、当時排日派と目せらるゝ直隸派との戦争開始せらるゝに当

りて、帝国が如何なる態度に出づべきやは茲に重大視せらるべき問題にして、帝国の各界、特に外務部、軍部等に於ては真剣味を以て研究せられたるは当然のことに属すべきである。而して我当局者は慎重審議の結果、此際支那の変乱に関し不偏不党不干涉主義を中外に声明せられたのであった。蓋し当時に於ける外交上、列国との関係上、止むを得ざる処置たりしは誰も首肯せし所であらう。

#### 第四 鈴木個人として取りたる決意

前項に述べたるが如く、我外務大臣よりは、隣国の変乱に関し不偏不党不干涉主義を声明し来りたるも、為之我が軍部の上司よりは特に何等の訓示訓令にも接する事なかりき。蓋し天津軍司令官は、條例上、天皇直隸官なるを以て、要する場合に於ては須く機宜の決心処置を取るを期待せられしなるべし。故に予は、事件の進展に伴ふて独断の処置を誤らざる如くなさんと之が決心を定めありしが、事件の発展と共に、奉直兩軍の首脳〔ママ〕者より頻りに小官に向つて各種の援助を乞ひ来るあり、而も当時我が小幡〔西吉〕公使は本国に帰還中にて、吉田〔茂〕新任天津総領事は当时尚未着任にて、共に帝国の将来を基として予が取るべき決心を語り談ずるに友なしと雖も、此際徒に無為にして時日を経過すべきにあらずと確信し、遂に左の如く決意するに至つたのである。

今回帝国外務大臣は、隣国の変乱に当り不偏不党不干涉主義の声明をなしたるは、現時の状勢上当然の事に属すべきも、更に一步を進めて帝国の将来に想倒〔ママ〕せば、今の時に於て我が特殊関係を有する東三省の主権者が万一敗滅に陥り、排日党の之に代るが如きことあらば帝国のため不利とする所であるが故に、予は当局者の意図を忖度して一身を犠牲に供し、此際自己の權威の及ぶ範囲内に於て精神的に奉軍に対し作戰上の利便を計ることに決心せり。

#### 第五 奉軍の関内増兵集中輸送に先ち張作霖氏に対し通じたる好意的注意

奉直兩軍の会戦地は天津を中心となすに至るべきは自然の勢にして、

此際列国軍の感情を害せざるものが、幾分たりとも戦争の結果を良好に導き得るは争ふべからざることであるから、予は奉天張作霖氏に対し、某手段を以て左の意味の電報を發した。

貴軍の天津附近に進出するに当りては、千九百一年の議定書の精神に基き行動して、決して列国軍の感情を害せざるやう慎重の注意あらんことを望む。

張使宛

鈴木

#### 第六 奉軍主力の関内集中の際与へたる間接掩護

奉天主力の天津附近に其の集中を故障なく完結し得ると否とは、正に勝敗の決を与ふるものなるは誰も首肯する所であらう。然り而して、奉軍主力の大半が京奉線により関内に輸送せらるゝ時日は、正に四月二十日頃より二十七日頃までの間なることは、某手段により予は之を知り得たと同時に、奉軍が京奉線に於ける各橋梁の守備を頗る嚴重になしありしを知る。之れ作戦上止むを得ざる処置なるべし。而して内偵するところによれば、英米軍は直派に対し好意を有する点より、此際此等橋梁掩護兵を撤せしむべく、千九百一年の議定書を楯として軍司令官會議に持出さんとなしあるが如し。而して之を撤せば、直派は間諜、若くは便衣隊を以て此等の橋梁を破壊して、奉軍の関内集中を不可能ならしめんと計画しあるが如しと。時恰も四月十九日、北京外交団より列国先任司令官たる予の許に左の如き通告要求あり。

「奉直兩軍の形勢日々切迫し来るにより、天津各国軍司令官は此際軍事會議を開催し、非常の場合に於て取べき遺憾なき計画を立案して、之を北京外交団に通告せられたし」(我が公使館附武官經由)

予は右の通告要求に対し、直に左の要旨の回答を發したのである。

「予は、北京外交団の通告要求のため列国軍司令官會議開催の要を認めず。蓋し軍事上の諸計画は、非常の場合に當りて初めて會議決定すべきものにあらずして、既定の計画ありて、今や之を変更するの要を認めざればなり」

右の通告を以て回答したる理由は、若し此際軍事會議を開催せんか、

前項内偵せし如く、英米側より、必ずや京奉沿線の奉軍の配兵を該線路両側二哩以外に撤去を要求すべき提議あるは火を賭るよりも明かであつて、今之を為すならば、奉軍の集中は少なくも大なる妨害を受くるに至るならん、依つて此際、奉軍を有利に掩護するためには、此の會議は開かざるに如かずと思意したのである。

斯くして予は、四月二十五日までは列国軍司令官に会することすら之を避くる如く行動したるも、予が意思を秘すべき手段として、翌二十六日午前、各国軍司令官に対し左の意味の通告をなし、予が官邸に会同を求めべく案内したのである。

「今や奉直兩軍の会戦は争ふべからず。近日中予ての租界防備計画を実施するの期に到達せん。依つて本日午後、諸官と会合して任務達成上に関し歓談せんとす。御來会を切望す。」

右の案内により、各国軍司令官は当日午後三時頃より來会して歓談せしが、英米兩國軍司令官より果して、京奉線に於ける各橋梁の奉軍守備兵あることを日本軍司令官は御承知ならん、特に灤河鉄橋の如きは約一中隊の守備兵あるに、何故速に千九百一年の議定書に基て該守備隊の撤去を要求せざるやと。予は此時、大いに予及び予が幕僚等の氣付かざりしを殊更詫び、今より奉軍に対し電報にて之が撤去を迫らんと述べ、直に幕僚に命じて張作霖氏に向け打電すると同時に、灤河守備隊にも該守備兵の撤去を要求すべしと命令したのであつたが、之が実行せられし頃には、恰も奉軍主力の殆んど全部関内に集中したる後でありし事は、此間の苦心を物語るものである。

#### 第七 奉軍の白河南方に向つて進出するに際し、奉天軍顧問に通じたる作戦上重大なる注意

四月二十七日、奉直兩軍の先進部隊は姚馬渡附近に於て衝突したるに始まり、続いて二十八日、良郷地方の陣地に抛れる直軍は、長辛店南方高地にある奉軍陣地に向て攻撃を開始し、翌二十九日払暁より更に激戦に移り、之より全線に亘り激戦を交へ、爾來連日連夜に亘り戦闘続行、互に勝負ありしが、此間五月一日、奉天軍総司令部は軍糧城に到着した

のであったが、軍事顧問某氏馳せ来りて予を官邸に訪問し、前回〔ママ〕の戦況を確むべく各種の問答をなせしが、此時予は同顧問に対し問ふて曰く、奉天軍は勝てる積りかと尋ねしに、氏答へて曰く、無論勝算確かなりと、予語を継いで曰く、予は両軍の状況を知り居るが、今日までの経過では、必ずしも奉軍が勝利確実なりとは断ずる能はず、依って君は奉軍敗退の場合に何れまで退くかを今より研究して置かれる方適切ならん、予の思ふには、若し現在の戦線にて敗北せば、少なくとも四十里後方の灤河の線まで退却せねば恐らく奉軍は収容出来ないであらう、君慎重に研究せられよ。

又目下の戦況では、豊台の正面が非常に間隙があるやうで危険であるから、軍の総予備は速かにあの方面に転用したらよからふなど、重大なる注意を与へて帰途に就かしめたのであったが、此時既に遅し、軍総予備たりし第十混成旅は、左翼馬廠方面の戦況に牽制せられて該方面に向って行動中にありしと聞いたのである。

#### 第八 奉軍の永定河畔の会戦に敗戦退却中に於て、同軍の潰乱を防止するため直隸軍の追撃を緩和するに取りたる手段

連日連夜の両軍の会議〔ママ〕は、数日間に亘り一勝一敗の状況にて継続せられありしも、五月三日に至り、直軍中最も精鋭と称せられありたる馮玉祥氏の部下第三十一旅の一支隊は、其最左翼山地方より迂回運動を起し、長辛店附近にありし奉軍の側面及び後方より圧迫を加へしかば、奉軍の右翼先づ苦戦に陥り、翌四日に至り、長辛店附近の陣地を固守せる奉軍も、終に直軍の猛撃に堪えずして全く潰乱に陥り、北京及豊台方面に向て敗退し、軍糧城にありし奉軍総司令部も、蒼皇として自ら廊坊に出陣して敗余の部隊を激励して見たが、大勢既に決し如何とも詮方なく、奉軍は全線に亘り総退却の止むを得ざるに至ったので、予が数日前奉軍顧問に注意せし如く、今や全軍灤河の線に向って退却するの止むなきに至った。而して当時直軍の追撃急にして、為に左翼張学良兵团及び最左翼騎兵集団の如きは、其大部は動もすれば其の退路を遮断せらるゝか、若くは白河の露と消ゆべき運命にありたるが如き悲惨なる

(此際張作霖氏より顧問を通じて予の許に、張学良の一身を救出するため其手段方法を頼むとの事なりし故、某をして自動車にて学良氏を救出のため其戦線に差遣せしこともありたり) 状況であったから、五日の夜、呉佩孚氏が其総司令部と共に天津に追撃隊を四列車に搭乗して到着したときの如きは、予は直に部下の憲兵長と軍通訳を中央停車場に差遣して、列国先任司令官の名を以て千九百一年の議定書に基き、貴軍は天津を去る二十清里以外に撤去せられたいと嚴重なる抗議をなし、其の追撃の鋭鋒を間接に挫きて、其総司令部と共に遂に予が要求の下に天津を撤去するに至らしめたのであった。

又翌六日には、直軍追撃隊が白河を船にて下りて追撃を決行せんと企図し、而も此際英米両国軍司令官及び両国総領事が、此直軍の行動を許可することに対し極力支持し(英米両国総領事の如きは、日仏の総領事をも誘ふて予が官邸に自動車にて乗り付け、強硬なる意見を吐露したのであった) たるに拘はらず、予は先任権を以て仏軍司令官と共に絶対反対意見を唱へて、遂に直軍の該行動を停止せしめ、「此際若し直軍にして強行白河を下らんとするならば、当時我が駐屯軍に必要な場合協力すべき訓令を帯び白河に在泊しありし我が駆逐艇隊(三艘)を以て砲撃せしむる決心なりき」、以て直軍の急追を阻止して間接に奉軍の退却を掩護し、併せて直軍追撃隊が白河を下る際、各国租界に上陸して掠奪等をなすを防ぎ得たのであった。

#### 第九 梁士詒、葉恭綽両氏の日本亡命

五月三日、奉軍の敗報を得てより、刻々危険の其身に及ばんことを掛念しつゝ、天津英租界にありし梁士詒、葉恭綽両氏は、直隸軍の追撃隊の天津に進入するに先ち、日本に亡命せんと企図し、其秘書鄭文軒氏を四日午前予が許に遣し、何とか日本汽船に乗ることを工夫し呉れとのことなりしを以て、予は目下の状況上、其企図を実行せんためには、早く乗船に便なる仏租界に居を移し亡命準備を整へ待たれたしと注意して帰らしめ、而して此件は幕僚にも秘して、直ちに郵船会社支店に当時の支店長大久保忠雄氏を訪問して、事の次第を打ち明け、仏租界「バンド」

に繋船しありし芝罘丸に今夜半後密に乗船するの手配を依頼したる処、同氏は恰も予が遠き姻戚関係あるため、予と共に責任を負ふことを辞せず、無事に本国神戸に上陸せしむべしと承諾し呉れし故、予も大いに喜び、此旨梁士詒氏に伝へたれば、当日夜に入りて仏租界の中法貿易公司（梁氏の関係公司）に移りて万般亡命に関する準備を整へ、大倉組よりは世話人二名附添へて同行する如く準備したのであった。而して予は、当夜窃かに（十二時半）右貿易公司に梁士詒氏を訪問して別れを告げ、午前三時、人目を忍びつゝ、無事一行は芝罘丸に乗船し、翌午前九時天津出帆、同日大沽バー通過まで、細心なる注意をして人目を避け得て、直隸軍の翌日天津に進入前に、辛じて難を避けしめたのであった。

#### 第十 奉軍の灤河の線に退却布陣せる前後に於て、同軍の作戦に対し与へたる利便

本戦争間に於て、奉軍に最も不完備なりしは諜報機関と搜索機関なりしことは衆目の一致する処にして、為めに開戦前は勿論、開戦後と雖、彼自らの蒐集したる情報は概ね我田引水の報告に止まり、其結果は徒に自派の優勢を過信して敗因を招きたるが、其退却作戦間に於ては、殊更敵の状況を知るに由なく、為に適宜当方より直隸軍の状況を某手段により奉軍に通報するの勞をとり、以て作戦上の利便を与へたのであった。

#### 第十一 灤河の線に於ける奉軍陣地を撤して、山海関に退却布陣するに至りたる助言

奉軍は約一週間の後、辛して灤河の線に其の主力を收容集結することを得て、新陣地の構成に着手し防禦工事をなし、此処を最後の陣地として決戦を企図して居ったが、予は直軍の圧迫及び其攻撃準備が比較的迅速なりしと、加之灤河兩岸の地形が当時の奉軍兵力に比し広きに過ぐるの感ありて決戦に不適當なるものと判断し、屢々使者を以て速に山海関の狭少なる地形に退却して機を見て攻勢に転ずるの可なるべきを張作霖氏に説得したが、五月下旬に入り、遂に山海関に随意退却をなして、同地に堅固なる陣地を占領することとなったのである。

## 第十二 山海関に於ける奉軍の攻勢移転に関する助言

奉軍が山海関の陣地に退却布陣するや間もなく、東支鉄道方面に高士賓氏の反旗を翻すあり、為めに東三省内の不穩に赴かんことを恐れて、急に張氏は某幕僚（顧問も共に）を従へ歸奉したので、山海関の正面は李景林氏、張学良氏の両兵団が併列して陣地を占拠し、之を孫烈臣氏総指揮官として残留することとなったが、適々六月五日頃より攻撃準備に着手せる直隸軍の、同十日に於ける攻撃配備が、戦術上の過を侵し頗る危険なる状況を呈しありたるを知り得たる予は、直ちに其状況を某方法手段により奉軍司令部に通告し、併せて附加するに、明弘暁より全線攻勢に転ずるを有利とすべきを以てし、特に其攻勢移転の方向並に概要の方法まで之を助言した所、孫烈臣氏は断然当夜午前三時より全線猛然として攻勢に転じ、翌十一日中に其第一線を以て敵を秦皇嶋の線まで压迫し得て、茲に当年戦役の最後の幕を閉ぢて、辛じて再挙の道を開くの端緒を得たのであった。

## 第二章 第一次奉直戦後より第二次奉直戦に到る迄の回顧

### 第十三 奉直兩軍の休戦

六月十一日、十二日に於ける奉軍の攻勢移転は、今まで勝ち誇りたる直隸軍に対し大なる打撃を与へたるため、茲に奉天軍は直隸軍に対し四分六分の状況まで其形勢を恢復するに至り、奉軍の喜悅譬ふるに辞なき程であった。特に奉天に於ては右の勝報を得るや、国旗を掲げて祝捷するが如き有様であつて、張氏の如きは歡極つて雀躍したといふことを聞いた。斯くして間もなく兩軍間に休戦條約成立して戦争休止となったが、奉天張氏よりは、直に海路（大連經由）某顧問を天津に遣はし予を訪問せしめて感謝の辞を述べしめたのであった。

### 第十四 奉直兩派間の和平運動

休戦後、幾度も奉直兩派間に仲裁すべく、王占元、鮑貴郷等の諸氏が大に奔走したのであったが、其條件纏らず、為めに真の和平解決を見るに至らず、互に次回の作戦準備に余念なきが如くなりしを以て、予は常

に直派の状況に関し、奉派のため某方法により状況通報の労をとり、続いて奉派に対し好意を以て彼の将来に対し利便を与へて居ったのである。

#### 第十五 徐總統の天津落と黎氏の晋京

曩に安福軍を撃破して其名を知られ、今又奉軍を撃破して勝利を獲得したる呉佩孚氏は、其権勢恰も旭日昇天の如く、遂に北京政府に干渉を試み、張作霖以下奉軍首脳者の官位勲等を褫奪する等、稍々横暴を極め、後又徐總統に辞職を迫るべき勢を示したれば、予てより此事あるべしと予期し居りたる徐總統は、其腹心たる王懷慶の護衛の下に、某日近侍二三と共に北京を逃れて天津に下り、先づ伊太利租界の親戚の宅に入り、後英吉利租界の自宅に移り、自然的に總統を辞したのであったが、呉佩孚氏は徐總統から一目先手を打たれた形となり、大いに驚き、速かに後任大總統を推戴せなくては、数日間たりとも無政府状態に導きたる責任は呉佩孚氏が負ふ訳となるのを厭ひ、極力在天津の黎元洪氏を推戴せんと欲し、殆んど強制的に黎氏に迫って、遂に六月十二日其晋京を見るに至ったのであった。

#### 第十六 黎氏の後任と、就任一ケ年後の退京、並に反直派の活動開始

黎氏は張紹曾氏を起用して内閣を組織せしめ、廢督裁兵を標榜して大に為すあらんと企図したのであったが、翌十二年六月迄約一ケ年間、張紹曾氏と共に頻に諸般の施設改善に努力したるも、又も呉佩孚氏より大なる干渉と圧迫を受け、遂に北京に居たゝまらず、六月十三日午後一時、臨時列車を仕立て、天津に下ったが、之を知りたる直隸省長王承斌氏は、呉佩孚氏の電命により、途中楊村及天津中央停車場に之を抑留し、大總統の印綬を渡すに非れば解放せずと迫ったので、遂に当時北京仏蘭西病院に入院中なりし黎氏の第三夫人の許に保管しありたる該印綬を、黎氏の秘書劉鐘秀氏が北京まで戻り持参して、之を王承斌氏に渡したるにより、初めて黎氏は解放せられて英租界の自邸に入ることを得たが、時正に午前四時半であった。予は当日北京に出張して居って、公使館にて公

使主催の午餐会に出席して居った時、黎氏の天津落の状報を得たるが故に、直に午後四時の汽車にて帰津の途に就きたりしも、右の如き途中に於ける黎總統抑留事件の為、着津時間が遅れて九時半頃官邸に帰ることを得たが、此時予が官邸には、黎元洪氏の令息と令嬢並に黎氏と共に天津に下り来りたる陸軍次長金永炎氏のあるありて、予に楊村及び中央停車場に於ける直派の暴状を語りて、黎氏を救ひ出し呉れとの頼みなりしも、予は諸般の関係上、慎重に考慮して自ら出馬することを避け、黎氏の令息、令嬢には慰安を与ふる如く説得して、十二時頃予が自動車にて金次長と共に黎氏の自宅に送り還らしめ、中央停車場には憲兵長を差遣して状況を逐一電話報告せしめて居ったが、午前二時半頃、段祺瑞氏の秘書兼参謀役たる姚震氏密に來訪して、当日に於ける政変と直隷派の黎氏に対する暴状とに基因して、此際反直同盟成立の機運熟したれば、黎氏の後釜に直に曹錕氏を大總統に擁立せんとする直隷派の専横なる企図を破壊するため、非常国会召集に議員が応ぜざるやう彼等を買収せんとするに要する費用数十万円の工夫を願ふとのことであつたが、予は元より如斯大金を私有せざるは勿論、如何に敏腕を有する人にてても到底右の望みに対し即座に満足なる答解を与ふること能はざるのが当然である、然れども熟々考ふるに、若し今にして何んとか直隷派の専横を挫くにあらざれば、愈々益々排日の熱を高からしめ、我が帝国の為め不利不尠と思へば、此際所有工夫を尽して見ねばならなかつたが、茲に漸く一案を考へ出したことはあるが、姚震氏には先づ何んとか考へて見やうが、到底斯る大金の金策は急には出来ないであらうと答へ、同氏も予の意を諒として、兎も角最善の努力を頼むと云ひ辞去したのであつた。次で予は、深夜直ちに（時恰も午前三時半なりき）信ずべき某を官邸に招きて、秘かに政変並に其状況等を委しく示して、明朝発の列車にて奉天に到り張使に会見して、左の如く予の意のある所を伝へよと命じた。

此際を除いては、反直同盟の結束を成功せしむべき機会なし。依つて其の運動に要する費用は、貴方より是非万難を排して工夫し、速に段派の有力者に向け送金せられたし。然らざれば将来反直同盟は成立せざるべし。

某は右の伝言を復唱して即時辞去して、翌十四日朝の列車にて奉天に向って出発したのであったが、十五日午前着奉、直に張使に会見、予が伝言を逐一伝達せしに、張氏は非常に喜び大いに感謝の意を表したりとは、当時奉派の顧問等よりの来信により之を知るを得たのであるが、如斯して張使は、止むなく数回に亘り金員を天津段派有力者に発送したのであった。然して此等の金員は約三十万元と記憶して居るが、此外、段派の有力者より十二三万元を醸出したる外、黎元洪氏が第一に六万元を出金し、合計約五十万元の金員を以て国会議員を買収して、六月十九日の憲法会議を不成立に終らしめた。斯くて直隸派が其后共国会を召集して毎回共法定の定員出席せず、為にいつも流会となりて、九月下旬まで其景況を継続し得たのであったが、此際予は尚ほ進んで我が二三の有力実業家に向って激〔ママ〕を飛ばし、大いに之が金策に努力して見たが、曩に寺内内閣が段祺瑞氏を支持して後失敗に終りたる前例もあるが為か、誰一人として予が言に耳を傾け呉るゝものなかりしは、当時予の最も遺憾とせし処であった。若しあの際に於て、我が実業家が僅かに一百万の金策に応じて呉れたならば、恐らく当年に於て既に段氏をして天下の輿望を担はしむる事を得て、民国統一の端を開くことを得せしならんか、今に於て之を追懐するも尚ほ遺憾の極みである。

#### 第十七 黎総統の上海行

前項に述べたる如く、此時機を捉へたる段派の有力者は、政学会の李根源氏等と気脈を通じ大に反直熱を煽り立て、先づ李根源氏をして内閣事務所を黎氏の自宅に設けしめ策動を開始し、後九月上旬、直隸派の熱烈なる運動漸次其効を奏すが如く見ゆるに至りたれば、反直派の策士連は十月十日以前（黎総統の任期）、黎氏を上海に到らしめて、同地に上海政府を組織して大総統府を移す計画を立案し、以て曹錕氏の総統選挙を無効ならしめんとし、此計画を反直派の某氏より予に相談に及び、何んとかして直隸派の嚴重なる監視中を逃れ上海に船出する工夫なきやとのことであつたが、予は此時既に本国に転任の辞令を拝受し、近く南方廣東まで旅行の命を受けありて其旅装準備中なりしも、窮鳥懷に入るの当

時の状況に於て、之をつき放すも情義なき仕打ちと思ひ、止むなく其計画実施の方法として、天津在住の信すべき某氏に命じて、山下汽船会社の防府丸を買収して船繰せしめ、日本呉服屋に命じて至急黒羽二重の羽織及び重ねの着物を新調せしめて、黎氏を病人としての旅装を整へしめ、之に日本某病院長某を囑托して附添看護婦二名と共に同船に乗込ませしめて、全く日本人の重病人が乗船帰国する如く装ひて、直隸派の監視を脱して、九月七日天津埠頭より乗船、上海に向け出帆せしめたのであったが、同十一日無事上海に到着した処、上海商民の非常なる反対を受け、遂に上海政府の組織失敗に帰し、同時に曩に好意を以て迎へたる芦永祥氏も、形勢の不利なるを見るや、大なる後援も与ふることなかりしかば、黎氏は遂に余儀なく我が別府に静養の身となつたのである。

#### 第十八 孫段張の三角同盟の連絡に就て

予は前項に述べたる如く、黎氏の上海行を演じたる時は、既に本国に転職の命を受けありて、其帰朝に先ち南支那を視察すべく其筋より命を受けて居つたから、黎氏の乗船出発の翌九月八日、天津を出発、津浦線にて上海に向つて発足したのであったが、之より前に予は段祺瑞氏と面談して、同氏より芦永祥氏及び広東孫文氏並に当時在香港の梁士詒氏等に、将来の反直行動に関する希望並に打合事項につき重要な伝達を依頼せられたれば、予も将来起るべき第二次奉直戦の前提たる諸般の計画を知るに恰適の機会を与へられたるを喜びたと同時に、従来段張両氏との関係もあること故、大いに勇み立ちつゝ、半ば段氏の使命を帯びて出発したのである。北京公使館等にては、又も軍閥外交をやるではないかなど、頻りに予の行動に対し、上海、杭州、香港、広東等の領事に打電して監視の眼を見張つたといふことであつたが、予は単に芦永祥氏に対しても、梁士詒氏に対しても、広東孫文氏の幕僚等に対しても、日支親善を旨として談話を試みたる外、段氏の伝言を伝へたるのみであつたから、別に外務側より故障を受けたることもなかつたけれども、先方よりは、其伝言に対し、段氏に又伝言を頼まれたるが故、之を天津に帰りて段氏に伝へたやうな訳で、恰も予は三角同盟の連絡者たるの感

はあった。而して天津を去るに臨みては、再び又段氏より奉天の張氏に伝言を依頼せられ（第二次奉直戦の作戦計画に等しき伝言にて、極秘にて予は楊宇霆氏の通訳にて張氏に直接伝達したのであった）、右の如くして予は任務地を去るに臨みても、尚孫段張の三角同盟のため重大なる仕事をなしたかの感を抱きつゝ、帰朝したのであった。

#### 第十九 曹錕氏大總統選挙

九月下旬に至り、直隸派はあらゆる手段を尽して議員買収の運動費を作り大いに活動したる結果、其功を奏したるに反し、反直派は運動費欠乏のため、十月上旬、曹錕氏をして遂に総統たるを得せしめたのであった。爾来直隸派は益々横暴を極め、漸次其地盤を拡張しつゝ、あったが、天下の同情は益々直派を去って反直派に帰し、呉佩孚氏は其の勢旭日昇天の有様であったけれども、張作霖氏は孫文、芦永祥両氏と気脈を通じ、共に段祺瑞氏を中心として大いに直隸政府反対の氣勢を挙げ、且つ大に軍備を整備しつゝ、時機の到るを待つて居たのである

#### 第二十 第二次奉直戦間に就て

予は本国に転勤（小倉）帰朝するや、直ちに東上、摂政宮殿下に駐屯軍の軍状を奏上し終りて帰還、新任務に就きありたるが、段氏及び其幕僚等より、時々状況並に希望に関し通信を受くることあり、為に身は天津と離れたるも、尚旧任務地を忘るゝ能はず、時々段氏並に張氏に対し進言せしこともあり、就中山海関の奉軍危急の際に於ては、段氏の希望により張氏に向け、此際奮発して百五十万元位の金策をなし、速に段氏の許に送付、以て馮氏買収の資を供せらるゝこと最も必要ならんとの書面を、適々張氏の顧問某氏が下の関通過帰奉の際、手渡したる事もあったが、之が果して張氏に通じたのであったか何うかは不明なるも、兎も角事實は其様に発展して、第二次奉直戦の好結果を見るに至ったのは、先づ以て孫段張の三角同盟のため幸であった。

〔付記〕本稿は平成25年度科学研究費・基盤研究(C)「清国駐屯軍・支那駐屯軍の研究」(課題番号24520768)の研究成果の一部である。